

不安感、易疲労

男性 四十六歳 会社員

主訴 不安感、易疲労（2年前より）

随伴症状 数年前から腎結石が溜まっていて、腎臓萎縮がある。いつも倦怠感があり、体や仕事に対する不安が常にあり、やる気が起きない。現在、神経科クリニックに通院して「うつ病」と診断を受けている。安定剤（2年前より）、降圧剤服用中。睡眠が悪く、食欲もあまりない。話し方が重い。

所見 「弦やや数」。中注から大巨にかけて圧痛。火穴（-）、胸鎖乳突筋（-）、脛骨外縁（-）。

処置 「扁桃」「瘀血」「副腎」各処置（照海・兪府・曲池に20分留鍼）。曲池、中封に施灸。

経過 2回目（8日目）違和感が減ってきたと、自分から話しかけてくる。「弦やや数」、中注（-）。「扁桃」「副腎」「自律神経調整」各処置。

3回目（15日目）体調はよいが疲れがでている。2,3日前から安定剤を服用していないという。「やや弦やや虚」、左天枢（+）。「扁桃」「肝実」「副腎」各処置。

4回目（25日目）笑顔がでる。調子がよくなっているようだ。「弦・虚」共に弱い。中注（+）。「扁桃」「副腎」「瘀血」各処置。

5回目（36日目）今週は忙しくて、疲れ気味だが、さほどきつくはない。体が動きだしたとあって喜ぶ。「やや弦」、「虚」はなし、中注（-）。「扁桃」「副腎」「自律神経調整」各処置。

考察 その後、一進一退はあったが、順調に少しずつ気分の変化があり、やる気を取り戻していった（根本的には腎結石の除去が必要になってくるが）。この副腎処置を中心に施していったのが、このような好転に繋がった。以前、「医道の日本誌」（1998年9月号）に「うつ病」の青年の症例を公表したことがあったが、やはり同じような処置をした。この症例では、途中から副腎処置に変更して著効がでてきたのを強烈な印象として覚えている。

このように副腎処置が現代の難病、「うつ病」に効くというのは不思議なことであるが、偽りのない厳然たる事実である。

うつ病は現在ではかなり解明されている。脳幹（網様体）からでてくるセロトニンとノルアドレナリンという神経伝達物質の出が悪くなり、平衡が障害されて起こることがわかっている。

腎経の照海（あるいは復溜）、兪府に留鍼することによって、内分泌の中樞である視床下部に刺激を与え、そこから副腎皮質刺激ホルモンがでる。この視床下部はうつ病と関係が深いと言われている海馬、扁桃体と同じ大脳辺縁系に属している。このすぐ下の隣接するところに脳幹網様体がある。おそらく、この刺激が脳幹にも及び、神経伝達物質のバランスがとれてくるのではないだろうか考える。

副腎処置でこのような神経伝達物質の平衡をとってくれる。やはり腎と脳の関係は大変深いものがあるといえる。